



北海道東部の積雪期のハイキングコースの調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2010-03-29 キーワード: 作成者: 小川, 隆章 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008307

北海道東部の積雪期のハイキングコースの調査

小川 隆 章

北海道教育大学釧路校

Hiking Courses of Eastern Hokkaido in Snow Season

Taka-aki OGAWA

Department of Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

要 旨

野外教育の実践活動は、夏に行われるものが圧倒的に多いことが指摘されている。北海道においては児童・青年の夏休みは短く、各種のスポーツ大会や学校行事が行われることも多い。一方他地域よりも冬休みは長い。積雪期が長く、とすれば、屋内での活動が多くなりやすい。北海道東部では同じ北海道でも日本海側に比べると冬の天候は恵まれている。筆者の印象では日本海側で雪が降ったり、風が強く、吹雪が多い時期に道東では穏やかな晴天が続く、積雪量も多くないように思われる。こういう地域では、もっと児童・青年を対象とした雪上ハイキングや歩くスキーなどの屋外活動の機会を多く設けてもいいのではないかと思う。そこで、積雪期のハイキングコースについて調べようとすると、意外にも文献になっているものがない。無雪期の、いわゆる「夏山登山」のガイドブックは何冊か出版され、各コースについて、執筆者が実際に調査して克明に記述がなされ、ハイカーは初めてのコースでも不安無く出かけることができる。ところが、積雪期のハイキングコースについては紹介されているものが見当たらない。低山といえども、山は無雪期と積雪期では様相が一変している。そこで、ここでは阿寒国立公園の地域の低山を主にとりあげ、網走・十勝・根室の各管内からも1ヶ所ずつ取り上げ、積雪期のハイキングコースの実態を調査して報告することにした。

- (1) 白湯山 (標高824m)
- (2) 阿寒湖畔のポッケ探勝路と森のこみち、および太郎湖・次郎湖
- (3) オンネトーと展望台 (標高788m)
- (4) 藻琴山 (標高1000m)
- (5) 和琴半島一周
- (6) 摩周岳685mコブ
- (7) 幌岩山 (標高376m)
- (8) 然別湖・東雲湖と天望山 (標高1173.9m)
- (9) 知床横断道から羅臼湖

の9コースについて記述し、コース中の注意したい箇所などを指摘するとともに、積雪期のハイキングの楽しさを伝えるようこころがけた。

はじめに

野外教育の実践活動は、夏に行われるものが圧倒的に多いことが指摘されている。北海道においては児童・青年の夏休みは短く、各種のスポーツ大会や学校行事が行われることも多い。一方他地域よりも冬休みは長い。積雪期が長く、とすれば、屋内での活動が多くなりやすい。北海道

東部では同じ北海道でも日本海側に比べると冬の天候は恵まれている。筆者の印象では日本海側で雪が降ったり、風が強く、吹雪が多い時期に道東では穏やかな晴天が続く、積雪量も多くないように思われる。こういう地域では、もっと児童・青年を対象とした雪上ハイキングや歩くスキーなどの屋外活動の機会を多く設けてもいいのではないかと思う。そこで、積雪期のハイキングコースについて調べよう

とすると、意外にも文献になっているものがない。無雪期の、いわゆる「夏山登山」のガイドブックは何冊か出版され、各コースについて、執筆者が実際に調査して克明に記述がなされ、ハイカーは初めてのコースでも不安無く出かけることができる。ところが、積雪期のハイキングコースについては紹介されているものが見当たらない。低山といえども、山は無雪期と積雪期では様相が一変している^(註1)。そこで、ここでは阿寒国立公園の地域の低山を主にとりあげ、十勝・網走・根室の各管内からも1ヶ所ずつ取り上げ、積雪期のハイキングコースの実態を調査して報告することにした。

(1) 白湯山（標高824m）

この白湯山の山頂の標高は950mであるというが、そこまでの登山道は無く、針葉樹が茂っていて眺望はきかないところである。筆者は無雪期にこの真の山頂をめざして藪漕ぎをしたことが有る。樹木が茂り、倒木が重なりあって困難を極めた。最高地点と思われる場所には何んの標識も目印も見つけることが出来なかった。ハイキングコースとしての「頂上」は環境省がボッケとして保護し、木道と展望台が設置されている眺望の素晴らしい所である。阿寒湖畔のスキー場のゲレンデの途中からスタートした自然探勝路がこの展望台まで整備されている。無雪期は幼い子どもを連れて散策する家族や湖畔の温泉に滞在する老夫婦などを含む多くの人々が軽登山を楽しんでいる。ボッケの奥に南側の林道へと連結する登山道へと木道を離れて草地に入るあたりに、7月から9月の初旬頃はネジバナ、ウツボグサ、ヤマクマバナなどの花が咲いている。

12月28日、スキー場のレストハウスの前から出発、ゲレンデに向かって左端を降り降りて来るスキーヤーの邪魔にならないように登る。振り返ると阿寒湖の湖面が見えている。20分ほど登るとスキーのコースが右にカーブし、同時に斜面が一時的に緩やかになる。5～10分ほど進むと左にカーブして、そこにボッケ探勝路の入口の大きな案内図が立っている。ベンチが設置され、一番目の標柱が立つ。この標柱が途中次々と18番目まで続くことになる。各標柱はスキー場までと展望台の方向と距離を表示している。途中の樹林には赤いペンキの印、テープの表示も所々に出てくるが、一番たよりになるのはこの標柱であり、積雪期もこれを番号順にたどることになる。無雪期にはクドイほどに感じられる標柱であるが、積雪期には、まだまだ足りない気がしてくるから不思議だ。筆者は2回、コース中でルートがわからなくなり、数メートルほどだが、間違った方向へ進み、次の標柱を見つけられず、後戻りした。

しばらく大きな樹木の間を歩き、展望が利かない。一時的に下り坂も通過する。小さな湿地の上に掛けられた木の柱を渡る箇所も有る。深い雪に覆われているので、柱からはずれると脚が雪の中に深く没する。

レストハウスから一時間、案内図の有る探勝路入口から30分ほどで、湯の流れる小川の脇に着く。説明板とベンチが設置されている。『歩道からはみだすと危険です』という注意書きが何回も出てくる。たしかに、この先の初めのうちは左に、やがて右にも出てくるボッケは高温で湯気を揚げています。これに接触したら火傷をするだろう。全身で浸かった場合は死亡事故にもなりかねない。このコースでは極力夏山登山道はずれないように進むようにしたい。左下にボッケを見下ろす地点では階段状の登りとなり、スノーシューを着けたままだとかえって歩きにくいと感じる。このあたりでは樹木の間から雄阿寒岳が見え隠れする。傾斜の急な林の中を通過し、18番目の標柱を過ぎると、地熱で雪の積もらないボッケが右に見え、木道と木組みの展望台に達する。車から出発して2時間余である。木道および展望台から阿寒湖の全体と雄阿寒岳の雄姿が見わたせ、立ち去るのが惜しい景色である。(山頂および途中で複数回、携帯電話の通話域であることを確認した)

(2) 阿寒湖畔のボッケ探勝路と森のこみち、および太郎湖・次郎湖

阿寒湖畔温泉街の東端に位置する阿寒湖畔エコミュージアムセンターと前田一歩園財団の間から湖畔のボッケまで、もう一本が遊覧船ターミナル（本社棧橋）から湖畔の森の中をボッケまでの2本の遊歩道がある。無雪期には車イスの人も同伴者と一緒に森林浴を楽しむ。国道際の第一駐車場から森の中を通りボッケに至る「森のこみち」はエコミュージアムセンターの開設と時を同じくして、平成14年4月に新たに設けられたものである。案内版によると、全長950mとなっている（最近のパンフレットでは新設の森のこみちに対応するかのよう、ボッケから湖岸を通り遊覧船ターミナルまでの遊歩道を「湖のこみち」と表記している）。

山本光一著『自然ガイド・阿寒』はこのボッケ探勝路について『またこの探勝路は冬期間も特別な装備（スノーシュー、歩くスキー）が無くても訪れることが出来るのも大きな魅力だ』（p.104）と解説している^(註2)。筆者はこの冬に3回この探勝路へ行って見たが、3回ともこの記述が当てはまらないという印象を受けた。3月9日に行ったときは大雪が降った直後だったようで、探勝路は除雪された市街の路から1mほどの段差となっていて、踏み跡も無かった。3月22日と26日は前回と異なり、何人かの人たちが歩いた踏み跡ができていた。しかし、1mに2つほどの雪の中に足が没したらしい跡が出来ていた。長靴やトレッキング・シューズで歩いている人は一足ごとに深く足が没する訳ではないが、片足が人の足で踏み固められて陥没しないところへ立ったかと思うと、次の足は50cmほど雪の中に没してしまっていた。1m進むごとにほぼ一回は膝上まで雪に足を取られ、難渋していた。筆者はカンジキを付けてボッケまで行き、帰りに「森のこみち」を帰ってみた。分岐から最初は階段

を登るのだが、深い雪が積もった階段は単なる斜面であり、歩きにくいということは無かった。探勝路から分かれて、1番目の標柱が立ち、次の番号の標柱を見つけてたどるとルートから外れることが無い。また「ワンポイントガイド」というカラー写真付きの解説板が1番から12番まで、次々と設置されているのも森の中を進む手がかりになる。ちょうど中間付近では雪が最も深くなり、標柱はわずかに頭を覗かせていて、番号は見えなくなっている。解説板もほとんど雪の中に没して、雪かきをしないと内容が全く読み取れない。ボッケから40分ほどで終点の駐車場に着いた。

雄阿寒岳の登山口の駐車場は筆者が3月22日にオンネトーに行った帰りに立ち寄って見たところ、除雪してあって、車を入れられた。しかし、その後の降雪のあと除雪してないためか、数日して行った時はまた雪に埋まって車の乗り入れは出来なかった。『滝口』と表示のある一つ目の水門を渡ると、「太郎湖480m,次郎湖850m」という標識が出ている。その先に雄阿寒岳登山届を入れる箱のほかに、「太郎湖・次郎湖入林届」の箱が並んでいる。阿寒湖の岸に沿って進む。登山道はもう一つの水門を渡ったところから阿寒湖と分かれ、阿寒湖の水が太郎湖へと流れ出る水路の北岸を通っている。今回は水門の20m手前を右側の樹林に入った。500坪程度のくぼ地の森は倒木が重なり歩きにくい、そこを越えると茂った針葉樹の間から太郎湖の湖面が垣間見える。針葉樹が密集して通りにくい斜面を下る。足を滑らせないように樹木に掴まると枝や葉に積もっていた雪が頭の上から降りそそぐ。斜面を降りると意外に広い湖岸に出る。車から出発して20分ほどでついた。以前に来たときはもっと雪と格闘して時間がかかったような気がする。太郎湖の西の岸から対岸を見ていると、時々、鹿が通るのが見える。湖面を小鳥の群れが舞っていくのが見える時もある。

阿寒湖が厚く凍る時も太郎湖は全面凍結しないようだ。阿寒湖の水が阿寒川へそそぐ水路になっているからか。それでも岸から湖面にかけて氷が張り、その上に雪が積もり、無雪期よりも湖面が狭くなるように見える。太郎湖から阿寒川への水路も一部の凍結によって狭くなっている、そこを渡って東岸へ移動し、次郎湖の方へ行く。違った位置から太郎湖を眺めながら。次郎湖への斜面は深い雪に没して歩きにくい。次郎湖も一年を通して全面凍結することがないようだ。次郎湖の岸近くは吹き溜まりとなり、一段と深い雪で体が没してしまいそうになる。湖の写真撮って早々に引き上げる。帰路は登山道を登山口へ戻るため、太郎湖と川に落ちないように、慎重にすすむ。太郎湖の西岸から次郎湖まで30分、帰路が30分、休憩時間を入れて、1時間40分ほどだ。(筆者は太郎湖も含めて今回のルートで何回か携帯電話が通話可能であることを確認したのであるが、まよりも倶楽部発行の資料によると、一部でつながらない場所が有るとい)



写真1. 太郎湖の岸を行く鹿たち
(太郎湖では鹿の姿を毎回見かける)

(3) オンネトーと展望台(標高788m)

若者の選ぶ北海道の3秘湖の一つといわれたオンネトーは今や良く知られた人気の観光スポットである。オンネトーと雌阿寒岳・阿寒富士の姿は北海道らしい風景である。無雪期には乗用車や観光バスで訪れる観光客があとを絶たない。積雪期は途中の野中温泉(雌阿寒温泉)でゲートが閉鎖され、車の通行ができなくなり、オンネトー周辺は人の訪れることの少ない秘境に戻る。

3月2日、野中温泉の前の公共駐車場に車を止め、オンネトーの岸まで歩き始める。ゲートは閉まっているもののオンネトーまでの車道は大まかな除雪がされていて、歩きやすく、スノーシューを着ける必要がなかった。岸边につくと、キャンプ場の方から湖面を縦断して来る数人の人たちが一列になって進んでいるのが見えた。ガイドに引率されて滝までスノーシューで往復して来た人たちだった。自分もスノーシューを着けて湖面を対岸まで往復する。湖畔の駐車スペースの有るところの山側に案内板があり、展望台への入口となっている。[北登口]の案内板が立ち、「展望台0.8K」と矢印と距離が表示されている。スノーシューを着けてログハウスのトイレの左側を西方向へ登る。途中で進路を南よりに変える地点で丸太が立ててあり、「北登口300M」「展望台400M」と、来た方向と進むべき方向を示す2枚の板を組み合わせた標識となっている。二つの距離を合計すると700mにしかならないので、北登口の0.8Kという表示と100mの差が有る。また、指し示す方向が実際の方向よりも時計回りに少しズレている。長年の積雪の圧力などにより動かされたのだろうか。この標識の地点からやや南方向へと斜面を登る。所々の樹木に赤いテープが付けてあるが、横に10mほどズレた位置にも赤いテープが有ったりして、どちらが登山道なのか気になる。斜面の高い方を目ざして登ると樹木が針葉樹から白樺などの広葉樹にかわり、間もなく展望台(標高788m)に出る。展望台の標識は丸太に「展望台」という白い文字と「北登口0.8K」、「南登口1.4

K」の方向を示す合計3枚の板を組み合わせた立派なものだ。その奥に厚く雪を被った小屋が建っていて、「雌阿寒岳火山噴火警戒避難対策事業・オンネトー展望台観測局」という名称と「北海道帯広土木現業所」という設置者の名前が表示されている。2年前に来た時はまだ無かったので、最近設置されたものだ。ここの山頂部だけ樹木が少なく、雌阿寒岳と阿寒富士とオンネトーが見渡せる。ベンチが有るはずであるが、今回は深い雪の下になっていて、見当たらなかった。

山頂の南側に樹木が無く、平坦な広場になっている。そこを通り南登口へと降りてみることにした。数年前に無雪期に来たことがあるが、雪の下となったルートがわからない。赤いテープも見当たらない。樹間から窺える雌阿寒岳・阿寒富士の位置から見当を付けて針葉樹林の深い雪の上を下っていくと、スノーシューの底に雪が固まり付いて歩きにくくなる。20mごとにこの「ダンゴ落とし」をしないと、歩きにくくなってしまった。依然として登山道はわからないまま樹林を下ると、なんとなく通路を感じさせる所があった。樹木の間隔が広く、雪面が平らになっている。さっきより歩きやすい。これを登山道と思い、歩みを早めてどんどん下る。すると、以前には確認できた雌阿寒・阿寒富士が全く見えなくなってしまった。一時的に見えなくなっても、また見えるようになるだろうと、どんどん下ると、盆地状の地形の中に降りてしまった。雌阿寒などは全く見えない。足寄町ラワンの方向へ下り過ぎたようだ。(後日地図を見ると、その地点とオンネトーとの間に標高680mほどの小ピークが有って、雌阿寒岳・阿寒富士の姿を遮っていたのだった。) オンネトーには何回も来ているので、安心感があり、今回はうかつにも磁石もたず、ヘッドランプも持って来なかった。道に迷って日没を迎えたらどうしようという不安が出てきた。北東の方向へ進路を変えて、斜面を登ると20分ほどで、雌阿寒・阿寒富士が見える位置へ出た。もうこうなったら、正確に南登口へ出ることより、オンネトーの湖畔の道道へ出ることが肝心だと思い、雌阿寒の方向へ進むと、「展望台1.0K」という表示が見つかり、間もなく湖畔の道路に降りた。降りた道路にはちょうど「展望台連絡路50m」の標識がある。山頂から南登口まで1.4Kのはずだった。湖畔の道路を野営場の方へ400mほど行く。やはり、オンネトーの南端のラワン川が流れ出る口の橋の手前に「南登口」の案内板が有り、「展望台1.4K」の表示が出ていた。正しい登山ルートはここから先ほどの「連絡路」の標識の地点までの区間は湖畔の道路に沿った樹林の中を通っていたのだ。たいていの見学者は野中温泉の方向からオンネトーにやってくるので、展望台へ登る場合は南登口から入る人は極く希であり、圧倒的多数の人が北登口から入り、そこへ戻るのが実情と思われる。青少年を引率して、積雪期に南登口からのルートを利用する場合はあらかじめ下見の時点で新たにテープの目印を用意するなどの準備が必要であろう。また筆者のやったような失敗を避け

る意味で、どんなに時間的に余裕が有る計画であっても、磁石とライトの用意は欠かしてはならないといえる。(オンネトーの湖畔でも展望台および今回のルート全体で携帯電話は圏外である)

(4) 藻琴山 (標高1000m)

藻琴山は屈斜路湖を北側に大きく東西に裾を広げてそびえる形の良い山である。また屈斜路湖の全体を見下ろす一番の展望台である。登山道は東側の小清水コースと北側からの東藻琴コースがある。両方とも車で8合目まで行けるので、無雪期は極めて登りやすい山である。北側からのコースは長い林道を山頂の1キロ手前の8合目の駐車スペースに車を止める。銀嶺水という湧水があり、銀嶺荘という無人の山小屋が設置されている(東藻琴村山岳会が管理する)。ここからダケカンバの樹林帯を歩き始めると、250mごとに山頂までの距離を表示した標識が導いてくれる。25分ほどで山頂である。一方、小清水コースは道道15号線(網走川湯線)の藻琴峠から少し山側に車で登った8合目が登山口となる。[阿寒国立公園藻琴山八合目園地]と大きく石に刻まれた広い駐車場ができています。[小清水725]という名前の展望ハウスもあり、屈斜路湖と斜里岳・知床山脈・オホーツク海を展望できるので、今や大型の観光バスも立ち寄る観光スポットである。ここから山頂まで、約2.2kmの登山道は別名スカイラインコースと呼ばれる眺めの良いコースである。

藻琴山へのハイカーが多くなるのは5月の連休の頃からである。二つのコースとも、8合目までの道の雪が消えて、小清水725展望ハウスも営業を始める。ルートの途中に残雪が多い時もあるが、通常のトレッキング・シューズで十分登れる。これから始まる夏山シーズンに備えて、足慣らしのため健脚の登山者も登るようだ。筆者は以前に4月の月末に小清水コースを登ったことがあった。ルートの最初の4分の1ほどは登山道に少し雪が残る程度だったが、お地藏さんのある広場(かつて避難小屋が有った跡、標高868m)の手前300mほどからは完全な雪山だった。尾根に出ると、南側斜面には雪が無く、北側斜面にはまだ大量の雪が残っていた。

5月の末になると小清水コースの屏風岩の手前にエゾノハクサンイチゲが咲き始める。満開になるのは6月に入ってからだ。6月中旬頃はマイヅルソウ、ゴゼンタチバナ、ミツバオウレン、ツマトリソウ、ウコンウツギ、チシマヒョウタンボクなどの花が目立つ。7月になると花の主役はイワギキョウに交代し、8月にはチシマセンブリ、トウゲブキ、コガネギクなどが目立つ。9月はエゾリンドウが屏風岩で登山者を迎える。9月の末から10月初旬に山頂付近から紅葉が広がり、これも見逃せない素晴らしさである。道東の平地に雪が降る11月になると、藻琴山の登山道に降った雪が溶けずに残る。しかしまだ、5月の残雪期のように、

通常のトレッキング・シューズで登れる。12月上旬になると雪が多くなるが、まだルートがはっきりしている。藻琴峠から8合目までの道路が除雪されないので、藻琴峠の路肩に車を止め、8合目園地まで20分ほど余分に歩くことになる。カンジキかスノーシューで登るとお地蔵さんの広場まではスムーズに行ける。広場の手前のダケカンバの並木が雪で白く飾られ、雰囲気がある。尾根道になると、左右のハイマツが雪の重みで背を低く垂れ、スクラムを組むように繋がって行く手をふさぐ。押し分けようとしてもびくともせず、ハイマツのトンネルの下を這って進む。

正月を過ぎると、雪が多く積もり、登山道もハイマツは完全に雪に没し、お地蔵さんの広場さえ位置が判別しにくくなる。まだ雪が柔らかく、筆者のような体重が有ると、カンジキやスノーシューを履いた足が膝上まで雪の中に没して歩きにくい。2月の下旬頃になると、雪が固くしまり、歩きやすくなる。屈斜路湖の湖面に幾筋ものオミワタリが出来ているのが見える。3月になると、日が長くなり、気温も温かく、しばしば手袋をはずしても寒く感じない。尾根には大きな雪庇が湖側に張り出す。無雪期にはお地蔵さんのある広場まではハイマツの背に隠れて湖面が見えないが、積雪期は雪の上に立つので、歩き始めから湖面が見える。急斜面の箇所はほとんど無い（あえて言えば山頂直下くらいだ）ので、アイゼンやピッケルは必要がない。山スキーで登る人たちも見かける。

筆者が今シーズン登ったのは4月1日だった。晴天で風も無く、藻琴峠から山頂までカンジキを使用して、途中の休憩を含め、1時間50分ほどで登れた。今回の初めての試みは山頂から下山して東藻琴コースの積雪期の実際と、8合目の無人の山小屋の状態を調査することであった。山頂直下の広場で小清水コースと離れると、俄然ルートがわからない。雪の上には踏み跡も無い。低地に急激に下るのをさけて、白樺の若木の間をトラバースして行くと山頂直前の小ピークから続く尾根状の高台に登った。眺めの良い場所だった。網走方面の海まで良く見え、東藻琴コースの林道が黒い樹林の中に白い帯のようにになっているのを確認できた。その終点のあたりに見当をつけて、急な斜面を下る。登山道のどこかの標識にぶつかるのを期待していたが、一つの標識にも会わず、8合目の直前に立ち木に打ちつけられた「ダケカンバ樹林帯」という消えかかった文字のある小さな横板を見つけただけだった。厚く雪を冠った山小屋は頑丈そうな造りだった。避難小屋であるので、当然ながら鍵はかかっていなかった。周囲に深い雪が積もっているのでドアを開けずらい。ストックとカンジキの足で除雪して、少しドアを開きかけると、すぐ内側にスコップが立っている。心にくいばかりの用意に感心した。中にはストーブが有り、太平洋炭鉱の紙袋に石炭が6袋置かれていた。携帯電話を出すと、山頂や尾根ばかりでなく、ここからも通話できることが確認できた。

(5) 和琴半島一周

和琴半島は岸辺を一周する散策路が整備されていて、全長2.4km、無雪期は1時間ほどで一周できる。200mごとに標柱が立ち、出発点からの距離と残りの距離を表示しているので、現在位置が分かる。また所々に解説板が設けられ、学習できる。

半島の付け根からスタートして、逆時計回りにオヤコツ地獄の上の展望台までは平坦な路で歩きやすい。危険な箇所もない。一方、半島の西側は岸辺の凹凸もあり、路のアップダウンがあり、変化に富んでいる。中間地点あたり、オヤコツ地獄の400mほど西側では急傾斜の岸の高い所に散策路が取りつけてある。雪が斜面と路に積もり、通過するのが危険な箇所がある。初心者を引率して渡る場合はロープを張るなどの工夫が必要になるかもしれない。

今シーズンでは筆者は3月21日に和琴半島に行ってみた。露天風呂の近く、半島を一周する散策路の入口の案内図を見ると、半島の中心部に「和琴山216m」という表示がある。半島の最高地点には一度も登ったことが無かったので、行ってみることにした。左右の湖岸を避けて、中心部を目ざして進むと、屈斜路神社に出会い、続いてその後ろに和琴神社が有る。こちらの神社は地域の神社ではなくて、教派神道の教団が設立したものなのだろうか。その教団の教祖らしき人の「御神歌」というものが掲げられている。その神社の脇を通り、緩やかな斜面をスノーシューで登る。倒木が雪を被っている。広葉樹が葉を落としているので、日の光が眩しい。約30分で最高地点らしき場所に着いた。山頂標識は無く、細い白い柱が雪の中から立ち、「基本測量 平成13年8月10日 国土地理院」と記されている。小さな標石も埋められているのか、頭の部分のみが雪の中から見えていた。その周辺は広葉樹が葉を落としているので、湖面が樹間から見えているが、展望は良くない。帰りは半島の西岸へと下ってみた。登って行った南側と違って、急斜面であった。スノーシューを外した方が歩きやすそうだったが、細い樹木につかまりながら、ジグザグに下る。斜面が緩やかになって、散策路につき当たる場所を捜しつつ進む。針葉樹の巨木が多く育った平坦な土地となって来た。ふと気がつく、斜め後ろに案内板らしいものが立ててあるのに気づき、戻ってみる。その案内板の前を散策路が通っているはずだ。想定される散策路を出発点の方向へと進むと、次の解説板や樹木の名札や距離を示した200mごとの標柱も次々と見つかった。背の低い標柱はほとんど雪の中に埋没して数字が隠れているものも有った。



写真2. オヤコツ地獄の西400m付近の危険箇所
(4月12日撮影、4月中旬でもこれだけの雪が残る)

らかな斜面になっているので、5～6mほどのこの雪の山に登ると見晴らしの良い展望台であった。(2月23日調査)



写真3. 巨大な雪庇

(6) 摩周岳685mコブ

摩周湖の第一展望台の駐車場は積雪期は無料となる。ここから摩周湖の南岸の外輪山を經由して西別岳への分岐までは登り下りの少ない登山道である。雪に埋まる時期は歩くスキーで行く人が多いようだ。筆者がスノーシューでここを歩いてみたのは2月下旬だった。摩周岳までは片道7.2kmと長いコースであり、また山頂手前500mの急斜面の登りは危険でもあるので、展望台から約3キロ先の三角点のある683.5mコブを目標として出発した。最初の緩やかな下り道から目標のコブが小ピークとして見える。無雪期と比べると積雪の分だけ高い位置を通るので、見晴らしが良い気がする。左側の湖面と右側の平野から風で雪が吹き寄せられて出来るのか、いつもの登山道の上に雪が盛り上がり雪庇もできていて歩きにくい。湖側よりも平野に面したほうが安全かつ歩きやすいように思われるので、登山道から右にズレて歩く。雪庇が巨大になり、身長の数倍くらいになっている所もある(写真3参照)。民話に出てくるダイダラボッチのようなユーモラスな顔の怪物に見える。一時間ほどでたどりついた高台は今回の目標地点のコブかと思われたが、登ってみるとずっと先に目ざすコブがあった。そのあたりはなだらかな斜面が広がり、通常の登山道がどこを通っているのかわからない。時々木の枝に結ばれた赤い布切れを見つけ、そこが登山道である事を知ることができた。樹木の葉が無く、高く積もった雪の上を歩くので、無雪期よりも湖面が良く見えた。凍結した白い湖面にオミワタリのように見える筋が出来ていた。出発点から2時間ほどで到着したコブにも巨大な雪の盛り上がりが出ていて三角点などは何も見えない。湖の方向から吹き上げる風が強いのか、平野の方向に層となって、切り立った雪庇だ。湖側はまだ

(7) 幌岩山(標高376m)

標高わずか376mながら、サロマ湖岸の中央部にそびえる天然の展望台として旅行ガイドブックにも紹介される観光スポットである。国道238号線から直接登って行けるという利点もある。佐呂間町の浪速地区と富士(トッピシ)地区の二方向から裏側より山頂近くまで車で行ける林道が走る。湖畔の国道からの登山道は2本、旅行ガイドブックには佐呂間町浪速の東登山口と同富士の西登山口の二つ記載されている。前者が浪速ルート、後者が富士ルートとも呼ばれる。前者が登り60分、後者は登り50分となっている。後者には道の駅が出来ていて、広い駐車場もある。売店もあり、飲み物・食べ物の調達もできる。そのすぐ上に悠林館というシャレた宿泊施設が冬季も営業している。東登山口の方はログハウス風の一般住宅と畑地の間の通路を通って車を入れると狭い駐車スペースがあり、トイレ(冬季は使用できない)と、幌岩山登山口の案内板が有る。3年前にこのコースをカンジキで登ったことがあった。最初の緩やかな斜面の畑なのか牧草地なのか、200mほどの登りはカンジキが膝まで雪に没して歩きにくかったが、樹林に入ると雪が少なく歩きやすく、風にさらされず、ありがたかった記憶が有る。今回(2月22日)はこのルートをスノーシューで行ってみる。樹林に入る時、後ろを振り返ると、国道の反対側の湖岸の樹林の上に湖が細長く姿を現していた。樹林の入口に入山届の箱と[山頂展望台まで1.8km 標高=80m]と記された標識が立つ。雪の上には踏み跡など無いものの、ルートははっきりしていて、迷うことはない。ところ所に標識が山頂までの距離を記していて、安心だ。倒木や雪の重みで登山路に身を曲げている若木もある。背の高い樹木が雪をまとって静かに立っている。時々木の枝などの雪が舞っている。危険なところは無いが、斜面をト

ラバースしている区間では雪があふれる程積もっているので、その上を行く時、雪とともに、谷側の斜面に滑り落ちないように注意が必要などころがある。国道を走る車の音が徐々に小さくなり、やがてほとんど聞こえなくなる。途中で『パーゴラ休憩所』というところがある。標高263m、展望台0.6km、国道1.4kmと記されている。周囲の樹木に遮られて、湖側の景色は部分的にしか見えない。山頂の手前で林道に合流する。道路の終点（展望台の下）のトイレの屋根に積もった雪の厚いこと。その上の急斜面を登ったところに無人の施設としては巨大な展望台が建っている。全く除雪してないので、急斜面を登るのが大変だ。2本のストックを使い姿勢を維持して崩れてくる雪に抗して一步一步登る。展望台からはサロマ湖の全景が広がる。流水でうずまいた海と凍結した上に雪が積もった湖面との境目が判然としない。国道からスタートして1時間40分ほどかかった。

(8) 然別湖・東雲湖と天望山（標高1173.9m）

冬の然別湖で湖上コタンが1月下旬から3月末まで開かれている。然別湖畔温泉の駐車場に車を置き、湖面を横断して東雲湖の方向へカンジキで歩くと、湖の上のイグルー（氷の家）が出来ているあたりまでは凍結した湖面に積もった雪が浅くて歩きやすいが、その先は雪が厚くスピードが落ちた。釧路周辺や屈斜路湖などよりも積雪量が多く、そのためか、オミワタリができないようだ。然別湖畔温泉から湖面を見た時は対岸に近い位置に見えていたイグルーは歩いてみると、実際には近い距離にあった。イグルーから東雲湖のある対岸まではむしろ数倍の距離があることがわかった。岸にちかい湖面では風の影響か、雪が氷の湖面にほとんど無く、カンジキの爪が氷に当たって歩きにくい。「いこいの森」の標識があるところから岸に上がる。森の中を進むとカンジキが全然雪にめり込まないで、すつくと上に立てる所もあるが、逆に太股まで没してしまう箇所も有る。岸から東雲湖までは緩やかな登りを35分ほど。帰りは1時間20分ほどであった。

2回目（3月29日）は天望山を目標として、トウマベツ登山口に車を止めるスペースができていたので、ここから出発する。スノーシューで、最初は湖畔に沿って登山道歩いてみるが、山から落ちてくる雪なのか、湖に向かって雪の斜面が出来ていて、歩きづらい。そこで、岸に沿って、凍結した湖面を進む。天望山登山口付近から陸に上がり、樹林の中を白雲山との分岐を目ざして登る。傾斜が一番きついところは45度ほどの斜面になり、スノーシューを着けた足が滑りがちになる。細い木につかまり体を支えて通過する。分岐まで約1時間30分だ。そこからは天望山の南斜面を登る。少しスノーシューで行ってみるが、いよいよ困難となり、アイゼンに換えてみる。さっきより足が深く雪に没するが、滑り戻されることは少なくなる。徐々に十勝平野の広がりが見えて来て、やがて山頂へ続く尾根に登る。

分岐から雪と格闘すること一時間半で山頂に着く。然別湖の白い湖面が眼下に広がる。下山は白雲山との分岐まで50分、湖岸までアイゼンで行き、スノーシューに換える。分岐から湖岸まで30分、湖岸から車まで30分だった。（天望山の山頂からは携帯電話が使用できた。東雲湖では確認していない）



写真4. 天望山から然別湖を見下ろす

(9) 知床横断道から羅臼湖

羅臼湖は知床横断道路の知床峠から羅臼町側へ3kmほどおりた見返り峠から直線距離にして2kmほど西に入ったところに位置している。無雪期は途中の一の沼から五の沼まで、5つの沼をつなぐ緩やかなアップダウンのある遊歩道を片道約1時間かけてたどる。二の沼、三の沼あたりから羅臼岳が勇壮な姿を見せる。山野草と野鳥も魅力であるが、ここはヒグマの生息地であるので、その対策も欠かせない。

4月下旬、知床横断道が開通（しばらくは午前10時から午後3時半まで）となると、道の両側の雪の壁の高さに驚き、そして遠く北方領土の浮かぶ海を眺め走る車でにぎわう。

同じ頃、ウトロ側の知床自然センターも開館し、知床五湖までの車の通行も始まる。

4月27日、晴天に白雪が眩しい知床峠に着くと、駐車場には沢山の車が並んでいたが、見かける人数は車の数に比べて少ないように見えた。ここへ駐車してスキーやスノーシューで雪の上に出ている人々がいるのだろうか。羅臼湖への通常の入り口がまだ2mほどの雪の壁になって入りにくいので、今回は30mほど峠寄りの地点からカンジキを着けて入山する。国道脇の標高734mコブの中腹をトラバースして一の沼の北側を通過するが、沼は雪に埋まっていた見えない。東を振り返ると海の先に国後島が長く広がり、爺々岳がはっきり見える。さらにその左に択捉島の一部かと思われる陸地まで見えている。西側のこれから行く羅臼湖の方向には、もうこの時点で見覚えのある知西別岳が見える。羅臼湖はこの山に抱かれるように左右に広がって

る。無雪期にはハイマツのトンネルをくぐって行き、沼のほとりの低い位置を通過するため、こんなに早くから知西別岳が見えることは無かったはずだ。知西別岳との間になだらかな丘陵が有る。その丘まで行けば羅臼湖が見えるのだろうか。その丘陵を目指してまっすぐ進み、次の二の沼と三の沼の箇所は南側の少し高いところを通過する。二の沼はやはり雪の下に姿を隠し、位置が判然としない。三の沼も雪に覆われて形が見えないが、平坦な雪面の一部が雪解け水を含んだようにやや薄黒い感じになっていて、そこへ足を置くと足が没してしまいそうな気配のするところが有った。斜め右後ろに晴天の下に羅臼岳が颯爽と聳えているのが見える。途中のなだらかな丘に立つと、その先にもう一つの丘が知西別岳の足もとを隠していた。四の沼の手前の湿原ではヤチボウズのような枯れ草の固まりが広い範囲に姿を現していた。無雪期にはこの湿原の北側を通るため、すぐ北側の天頂山に遮られて羅臼岳は見えないのだが、今回はここでも湿原の南側の少し高いところを通ったので、羅臼岳の雄姿が望めた。そして、もう一つ無雪期と違い、湿原の南に無名の沼が今回は見えていた。小さな四の沼らしき場所を越えると五の沼が右に見えてきた。その南側の丘へ立つと、北側に五の沼の水面が白い雪原の中に青空を映し神秘的に輝き、北側の岸に深緑のハイマツが彩りを添えていた。知西別岳の手前の羅臼湖の湖面は全面雪に覆われているのが見える。国道から歩くこと1時間半ほどで湖畔に着く。

往路はルートを考え、頻りに写真を撮り、風景を楽しみ、今シーズン最後となる雪上ハイキングを味わうようにゆっくり行ったが、前述のように3時半にゲートが閉まると聞いていたので、復路は自分の足跡をたどって早足で歩き、1時間ほどで国道に戻った。



写真5. 二の沼の付近を進む

終わりに

ここでは阿寒国立公園地域の6ヶ所のほか、十勝・網走・根室地方から各1ヶ所のハイキングコースを取り上げ、積

雪期のコースを実態調査して報告した^(注3)。同じく積雪期といっても冬のはじめから早春まで、微妙な違いが有るものと思われる。また同じ時期でもその年によって積雪量や雪質も異なることがあるので、初心者を引き率してこれらのコースをハイキングする時は状況に応じて慎重に行動していただきたい。阿寒国立公園地域については川湯エコミュージアムセンターおよび阿寒湖畔エコミュージアムセンターで指導を受けることをお勧めしたい。両センターとも最新の状況を教えていただけるばかりでなく、必要なスノーシューあるいはスキーを借り出すことも出来る。

筆者は今回の一連の調査を企画して、昨年12月から本年4月まで実施してみて、あらためて雪上ハイキングの楽しさを再認識した。次のシーズンまで、しばらく雪の上を歩けないと思うと、名残り惜しい気もする。まさに『楽しきかな、雪上ハイキング!』と実感する次第である。

注

(注1) 筆者はこの冬に札幌の円山に登った。都会のそばの低山であるため、雪の季節になっても毎日のように登る人がいるので、雪の上に明瞭な踏み跡ができ、踏み固められて歩きやすい状態になっていた(前年に行ったときは登山道が完全に氷の道となり、アイゼンが必要であったが、ルートは明瞭であった)。地元の人が「この近くの三角山もいいですよ」と教えてくださった。筆者が、「そうですか。その山に無雪期に一度登って、ルートをおぼえてから、冬にも登ってみたい」と言うと、その人は「毎日のように誰かが登っているの、ルートははっきりしていますよ」とおっしゃっていた。それとは対照的に北海道東部の低山では積雪期のハイカーは少ないので、夏山登山道は雪の下に隠され見えない場合が多い。

(注2) 山本光一著『自然ガイド・阿寒』は写真・イラストも美しく、記述が細かく丁寧で、貴重な本である。

(注3) ここにあげたコースのほかに、さらに初心者むけの短いコースとして、国道391号線沿線のショート・コースを挙げておきたい。全くの初心者はこれらの容易な短いコースから始めて、次第に長い、標高差の有るコースへ挑戦されたいかがであらう。

- ①岩保木山(無雪期と同じく岩保木水門への道から細岡展望台へ通じる林道へ入り、砂利採取場の入り口の先に車を止めて歩く。片道1時間弱)
- ②遠古武湖畔オートキャンプ場から夢ヶ丘展望台(片道1時間弱)
- ③標茶町の駒丘運動公園の西側の軍馬山(標茶生活保安林)
- ④屈斜路湖畔の仁伏温泉からボンボン山(片道約40分)

文 献

- 阿寒湖畔エコミュージアムセンター運営推進協議会(2002)
「白湯山自然観察路」(自然観察路ガイドシリーズ)
阿寒湖畔エコミュージアムセンター運営推進協議会(2002)
「オンネトー遊歩道」(自然観察路ガイドシリーズ)
浅野孝一(1995)『低山逍遙の真髄』山と溪谷社
伊藤健次(1996)『大雪山を歩く』山と溪谷社
今村朋信・鮫島惇一郎(編)(1992)『山と私たち…北海道
自然保護読本…』社団法人・北海道自然保護協会
梅沢 俊(2000)『北梅道の山』山と溪谷社
梅沢 俊・菅原清彦(1995)『北海道・夏山ガイド③東・北
大雪、十勝連峰の山々』山と溪谷社
梅沢 俊・菅原清彦(2002)『北海道・夏山ガイド⑥道東・
道北・増毛の山々』(改訂版)山と溪谷社
梅沢 俊・伊藤健次(1993)『北海道の百名山』山と溪谷社
江橋慎四郎(編著)(1987)『野外教育の理論と実際』杏林
書院
北田絢一(1995)『山のトラブル対処法』山と溪谷社
近藤和美(1996)『冬山』山と溪谷社
佐野 豪(1986)『指導者のための野外教育読本』大修館書店
道新スポーツ・編(2000)『北海道百名山』北海道新聞社
日本野外教育研究会(1998)『自然体験活動の報告書・レポー
ト・論文のまとめ方』杏林書院
福島正明(2001)『中高年の雪山入門』東京新聞出版局
藤 泰人(1999)『摩周 屈斜路』北海道新聞社
北海道のエコツーリズムを考える会(2000)『北海道ネイチャー
ツアーガイド』山と溪谷社
公立学校共済組合(2000)『ウォーキングマップ・北海道』
星野敏男ほか(2001)『野外教育入門』小学館
増田和彦(1998)『日本百名山と文化史』蒼洋社
まりも倶楽部(2002)「阿寒湖ボッケ・森のこみち・まりも
の不思議体験マップ」No.3
山本光一(2001)『自然ガイド・阿寒』北海道新聞社
横山厚夫(1995)『低山を歩く』山と溪谷社